

非対面のボランティア的行為における想像力と生きづらさ ——多回数献血者への聞き取り調査の結果から

九州大学大学院人間環境学府博士後期課程/日本学術振興会特別研究員 (DC) 吉武由彩

1 目的

本報告では、社会的連帯の形成の可能性について、献血者の「想像力」を題材に検討することを目的とする。献血は行為の担い手と受け手とが直接には接点を持たない非対面のボランティア的行為であるため、献血者の持つ受け手への「想像力」に着目した。ただし、献血や寄付・募金といった非対面のボランティア的行為に関する先行研究は多いとは言えない。想像力についても、先行研究によって定義が異なり多様に使われる傾向がある。分析にあたっては、献血者と受け手の関係を匿名の関係とする議論や (ティトマス 1973)、想像力による相互贈与関係とする議論 (藤村 1987) に依拠し検討している。

2 方法

想像力を検討するにあたり行為の継続性を重視し、多回数献血者としてこれまでの献血回数 50 回以上の献血者を対象に、聞き取り調査を行った。50 回以上の献血者となるためには、2 年以上の継続が必要となる。調査は、2013 年 1 月から 5 月にかけて、福岡市の献血ルームにて行った。今回の聞き取り調査では、現在の献血動機だけでなく、ライフヒストリーを尋ねることによって、対象者がどのような経緯で想像力を持つにいたったのかを検討した。なお、対象者からは、被援助経験を有している献血者を除外し、特に被援助経験などのきっかけを有しないが献血を継続している献血者について、その想像力を検討した。想像力は、「献血においては、血液の受け手は見えませんが、見えない人でも助けられるのはどうしてですか。相手が見えないため、必要性が強く伝わらないことや、受け手への共感が難しいなどの困難はありませんか」というワーディングで尋ねた。

3 結果

調査結果は大きく分けて 3 つある。1 つ目は、想像力が育まれる経緯については、定位家族や幼少期の地域の影響などが存在すること。この点については、非対面のボランティア的行為であっても、家族や地域といった対面のボランティア的行為の場合と類似の傾向がうかがえた。2 つ目は、献血には、献血者の持つ生きづらさを癒す機能があること。この点については、多回数献血者は献血に来て、そこで貢献をし社会との接点を持つことによって、精神的充実感を得て、再び日常へと戻っていく。3 つ目は、多回数献血者においては、受け手が希薄化し自己が肥大していくこと。献血は非対面のボランティア的行為であり受け手からのフィードバックがないためか、受け手というのはあまり意識されない。その代りに、献血継続の理由が自己に求められ自己が肥大していく (献血は癒し、充実感、健康管理など)。

4 結論

非対面のボランティア的行為について検討したものの、想像力が育まれる経緯については、対面のボランティア的行為と共通であるように思われることなど、対面/非対面の双方において共通すると思われる点もある。しかし、非対面において特徴的ではないかと思われるのは、知見の 3 つ目にある、受け手が希薄化し自己が肥大していくということである。

文献

藤村正之, 1987, 「ヴォランティア・アクションにおける想像力と意味付与—民間福祉財源システムとしての『あしながおじさん』制度」『季刊社会保障研究』 22(4): 373-386.

Titmuss, Richard M., 1973, *The Gift Relationship: From Human Blood to Social Policy*, Suffolk: Penguin Books.